

寄稿

# 自由教育 (Liberal Education) で求められる 「本質的で不可欠な学修成果」

## 学士課程教育改革の旗振り役、AAC&Uの取り組み



大阪大学高等教育・入試研究開発センター長・教授

川嶋 太津夫

### 「危機感」から始まったAAC&U

高等教育の質保証と学位の国際的通用性への圧力が高まる中、2008年の中央教育審議会の答申『学士課程教育の構築に向けて』は、「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」及び「入学者受入の方針」という3つの方針に基づいて、大学が自主的に教育の質保証に努めると同時に、各種の学協会及び大学団体による各大学の教育改善に資するような活動への期待を示していた。その一環として、文部科学省は日本学術会議に英国のSubject Benchmark Statementに準じた「分野別参照基準」の策定を依頼し、現在までに25の分野で参照基準が策定されている。大学進学率の上昇、高等教育機関の増加と多様化、そして学問分野の急速な分化等により個別大学だけの努力では、大学教育の質保証は十分ではない、という認識が中教審にはあったものと推測される。

このような、学協会あるいは大学団体による大学教育の改善の取り組みとして、国際的にも高い評価を受け、また、日本の大学教育学会と交流協定を結んでいる組織が、米国ワシントンDCに本部を置くAssociation of American Colleges and Universities (AAC&U)である。AAC&Uは、「自由教育(Liberal Education)」の価値とその重要性を、その設立当初から一貫して唱導してきた団体である。AAC&Uは自らの使命を次のように表明している。「AAC&Uの使命は、高い質と公正さこそが、民

主主義を実現・維持するための優れた学士課程教育(Undergraduate Education)の基盤と考え、自由教育の活力とその社会的地位を高めることである」。

では、なぜAAC&Uは、大学院も含めた高等教育全般ではなく、学士課程教育における自由教育の意義を強調し、それへの社会からの支持と評価を高めることを、その使命としているのであろうか。その理由は、ほぼ1世紀前に遡る、この組織の設立の経緯にある。

1815年、シカゴに150余りの小規模なカレッジの学長らが集まり、AAC&Uの前身組織であるAssociation of American Colleges (AAC)を設立した。もともと米国の高等教育は、1636年設立のハーバード・カレッジをはじめとして、宗教的後継者と善良な市民育成を目的とし、小規模な全寮制の教育機関として、いわゆる「リベラル・アーツ」科目を中心に全人教育を提供してきた。しかし、19世紀終盤から20世紀初頭にかけて、大学院教育を重視したシカゴ大学やジョンズ・ホプキンス大学等が相次いで設置され、さらにはハーバードやイエールをはじめとする有力なリベラル・アーツ・カレッジも学士課程教育に加えて研究と研究訓練を中心とした大学院を有する「総合大学University」へと発展していった。大学史家F.ルドルフが指摘する「collegeからuniversityへの移行」である。そして、小規模なカレッジが提供しているリベラル・アーツ科目を中心とした全人教育的な自由教育は、「時代遅れ」であるとみなされるようになった。

そこで、自由教育及び自らの存在に危機感を抱いた小規模カレッジが集まって、相互支援と自由教育の意義を世に訴えるために設立したのがAACであった。

その後、AACは、発足当初より自由教育の価値に賛同する大学であれば、設置形態に拘わらず受け入れるという「包摂性inclusiveness」をモットーとしてきたこともあり、州立、私立を問わず、総合大学であっても、例えば文理学部(College of Arts and Sciences)のように、学士課程教育において自由教育の理念に基づく教育を提供していれば会員として受け入れてきた。そこで、1995年、名称にUniversitiesを加えた現行のものに変更した。会員は、基本的には米国の高等教育機関であるが、その他にも州の高等教育運営機関や海外の賛助機関も含む。現在の会員機関数は約1400大学に及び、その中には、ハーバード大学やカリフォルニア大学等の有力な研究大学も含まれている。<sup>(注1)</sup>

### 21世紀の「自由教育」とは

では、AAC&Uが強調する「自由教育」とはどのような教育を指すのであろうか。様々な解釈と理解があるが、歴史を遡れば、ローマ、ギリシア時代の「自由市民」までたどり着く。自由市民は、生活に必要な活動は不要であり、彼らは音楽や詩歌を享受していた。さらに時代は下り、中世大学では、医師、法律家、神父等の職業教育に先立って「三学(文法、論理学、修辞学)」と「四科(代数学、幾何学、天文学、音楽)」が教授されていた。つまり、自由教育は、特定の職業教育によってもたらされる狭くて偏ったものの見方から人々を解放し、文字通り人々を偏見や思い込みから「自由にする」教育である。ジョン・スチュアート・ミルの言葉を借りれば「大学は職業教育の場ではありません。(中略)大学の目的は、熟練した法律家、医師、または技術者を養成することではなく、有能で教養のある人間を育成すること」なのである(『ミルの大学教育論』)。

しかし、社会経済のみならず、高等教育の役割も時代と共に大きく変化していることもあり、AAC&Uは、従来理解されてきた自由教育と21世紀に求められる自由

教育の違いを図表1のように整理している。

そこで、今日の自由教育は、100年前のAAC発足時のように小規模のリベラル・アーツ・カレッジだけではなく、初等中等教育や職業教育プログラムも含めて、全ての生徒と学生を対象に、全ての教育機関で提供すべき教育であるとAAC&Uは考えている。「自由教育とは、一人ひとりに力を与え、複雑で多様な変化に対応できるように、その準備として大学が提供する学習の一つの考え方である。そのような教育を通じて学生に広範な世界に関する幅広い知識(科学、文化、社会)と特定の領域への興味関心に関する深い学習を提供する。自由教育は、学生が、社会的責任感とともにコミュニケーション能力、分析力、問題解決力、さらには獲得した知識や能力を現実世界の諸問題に応用できる能力といった、強力かつ移転可能な知的・実践的能力を獲得するのに役立つ」からである。<sup>(注2)</sup>

このような確信の下、AAC&Uは自由教育の普及、理解を促進するため、様々な取り組みを行っているが、その中でも、(1)自由教育の重要性と意義を普及する取り組みであるLEAP(Liberal Education and America's Promise)、(2)自由教育を通じて学生に修得を期待する21世紀で活躍するために必要な「本質的で不可欠な学修

図表1 「自由教育」とは何か：  
20世紀までの自由教育と21世紀の自由教育

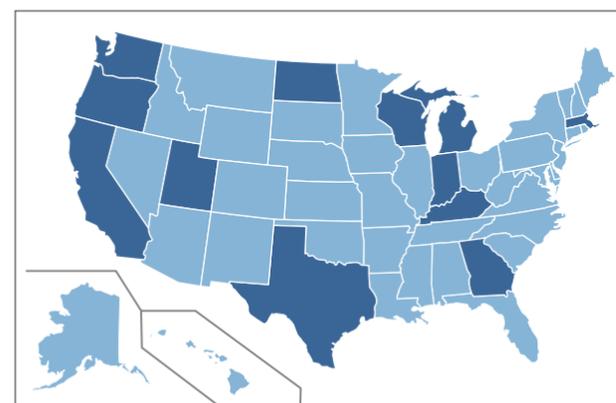
	20世紀の自由教育	21世紀の自由教育
何か	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的・人間的成長</li> <li>・恵まれた若者の選択肢</li> <li>・非職業的という理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的・人間的成長</li> <li>・全ての学生にとって必須</li> <li>・グローバル化した経済で成功し、情報に熟知した市民になるために不可欠</li> </ul>
どのように	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人文学と自然科学における学習(専攻)と大学低年次における一般教育での学習を通じて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校から大学まで全ての教育課程を通じて、徐々に達成水準を高くしながら、本質的で不可欠な学修成果を重視した学習を通じて</li> </ul>
どこで	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リベラル・アーツ・カレッジまたは総合大学の文理学部</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全ての学校、コミュニティ・カレッジ、カレッジ、総合大学、そして全ての専攻分野</li> </ul>

出所: <https://www.aacu.org/leap/what-is-a-liberal-education>

成果(Essential Learning Outcomes: ELOs)」、(3) ELOsの達成度を測定する評価規準(Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education: VALUE Rubric)、そして、(4) ELOsの達成に「非常に影響力が大きい教授手法(High-Impact Educational Practices: HIPs)」について、以下で簡単に紹介しよう。



その名称が示すように、LEAPは個人にとっても、また米国のグローバル化した経済と民主社会にとっても、自由教育はそれぞれの将来を約束するものであることを全国的に唱導し、各大学での具体的な行動を促すことを目指して2005年から開始され、現在まで継続して実施されているAAC&Uの中核をなす取り組みである。その背景には、21世紀は、より多くの大卒の労働者としてより積極的に知識豊富な市民を必要としており、これからの大学卒業生には、彼らが一層複雑な環境のもとで何事にも責任を持ってやり抜くためには、より高度な学習と知識、そしてより一層強力な知的スキルと実践的スキルが不可欠であるという認識がある。そこで、AAC&Uは、単に大学や他の大学団体との連携協力のみならず、産業界と州等の各種政府、そしてLumina Foundation等の財団との連携を強め、文字通り国民的運動として自由教育の普及と推進に邁進している。現在、州としてLEAPに賛同し、州内の州立大学で、ELOs、VALUE Rubric、HIPs等の研究開発と実践を進めている州は、カリフォルニア州等13州に及ぶ。(注3)



色の濃い13州がLEAP 賛同州(AAC&Uのウェブより)

図表2 本質的で不可欠な学修成果(Essential Learning Outcomes)

<b>人類文化と物理的・自然世界に関する知識</b>
・科学と数学、社会科学、人文学、歴史、言語及び芸術の学習を通じて その際、現代及び人類永遠の大問題に取り組むことを重視する
<b>知的並びに実践的スキル(以下のものを含む)</b>
・探求と分析 ・批判的・創造的思考 ・文書と口頭によるコミュニケーション力 ・計量的リテラシー ・情報リテラシー ・チームワーク並びに問題解決力 徐々に難しくなる課題、プロジェクト、そしてより高度な達成を目指し、すべての教育課程を通じて、集中的に実践される
<b>個人的並びに社会的責任(以下のものを含む)</b>
・市民としての見識と行動(地域及び世界の) ・異文化に関する知識と能力 ・倫理的判断と行動 ・生涯学習基盤力 多様な共同体と現実社会の課題に主体的に関与することを通じて定着する
<b>統合的な学修(以下のものを含む)</b>
・一般教育と専門教育で学習した内容の総合とより高度な遂行知識とスキルの応用と新しい状況と複雑な課題への責任を通じて示される

出所: <https://www.aacu.org/leap/essential-learning-outcomes>

図表3 企業が重視する大学教育の学修成果(肯定率70%以上の項目)

<b>人類文化と物理的・自然世界に関する知識</b>	
・民主主義やその価値に関する知識と理解	87%
・リベラル・アーツと科学の分野の広範な知識	78%
・知的スキルと米国以外の社会や文化の理解	78%
<b>知的並びに実践的スキル(以下のものを含む)</b>	
・口頭によるコミュニケーション力	85%
・多様な集団におけるチームワーク力	83%
・文書によるコミュニケーション力	82%
・批判的思考力と分析的な判断力	81%
・複雑な問題解決力	70%
<b>個人的並びに社会的責任(以下のものを含む)</b>	
・多様な状況における問題解決力	96%
・地域社会と民主社会に貢献するために不可欠な市民としての知識とスキル及び判断力	86%
・倫理的判断力と意思決定	81%
<b>統合的な学修(以下のものを含む)</b>	
・現実社会での応用力	80%

出所: Hart Research Associates. Falling Short? College Learning and Career Success. (2015)



AAC&Uが次に取り組んだのは、21世紀の諸課題に立ち向かうために、自由教育を通じて全ての学生が身につけなければならない必須の知識や能力、すなわち「本質的で不可欠な学修成果」とは何か、という課題であった。そこで、AAC&Uは、産業界からの様々な提案、ビジネス、看護学、教員養成等のアクレディテーション基準などを分析し、さらに会員大学等との幾度もの意見交換を経て、前ページのような学修成果の作成に至った。

このリストにある学修成果(知識や技能)は、前ページでも述べたように高等教育関係者だけで決定したわけではなく、産業界との対話を通じて得られたものである。

図表4 VALUE Rubricの例(批判的思考力)(注4)

**CRITICAL THINKING VALUE RUBRIC**  
for more information, please contact rubric@aacu.org

The VALUE rubrics were developed by teams of faculty experts representing colleges and universities across the United States through a process that examined many existing campus rubrics and related documents for each learning outcome and incorporated additional feedback from faculty. The rubrics articulate fundamental criteria for each learning outcome, with performance descriptors demonstrating progressively more sophisticated levels of attainment. The rubrics are intended for institutional-level use in evaluating and discussing student learning, not for grading. The core expectations articulated in all 15 of the VALUE rubrics can and should be translated into the language of individual campuses, disciplines, and even courses. The utility of the VALUE rubrics is to position learning at all undergraduate levels within a basic framework of expectations such that evidence of learning can be shared nationally through a common dialog and understanding of student success.

**Definition**  
Critical thinking is a habit of mind characterized by the comprehensive exploration of issues, ideas, artifacts, and events before accepting or formulating an opinion or conclusion.

**Framing Language**  
This rubric is designed to be transdisciplinary, reflecting the recognition that success in all disciplines requires habits of inquiry and analysis that share common attributes. Further, research suggests that successful critical thinkers from all disciplines increasingly need to be able to apply these habits in various and changing situations encountered in all walks of life. This rubric is designed for use with many different types of assignments and the suggestions here are not an exhaustive list of possibilities. Critical thinking can be demonstrated in assignments that require students to complete analyses of text, data, or issues. Assignments that cut across presentation mode might be especially useful in some fields. If insight into the process components of critical thinking (e.g., how information sources were evaluated regardless of whether they were included in the product) is important, assignments focused on student reflection might be especially illuminating.

**Glossary**  
The definitions that follow were developed to clarify terms and concepts used in this rubric only.

- Ambiguity: Information that may be interpreted in more than one way.
- Assumptions: Ideas, conditions, or beliefs (often implicit or unstated) that are "taken for granted or accepted as true without proof." (quoted from [www.dictionaries.reference.com/browse/assumptions](http://www.dictionaries.reference.com/browse/assumptions))
- Context: The historical, ethical, political, cultural, environmental, or circumstantial settings or conditions that influence and complicate the consideration of any issues, ideas, artifacts, and events.
- Literal meaning: Interpretation of information exactly as stated. For example, "she was green with envy" would be interpreted to mean that her skin was green.
- Metaphor: Information that is intended to be interpreted in a non-literal way. For example, "she was green with envy" is intended to convey an intensity of emotion, not a skin color.

**CRITICAL THINKING VALUE RUBRIC**  
for more information, please contact rubric@aacu.org

**Definition**  
Critical thinking is a habit of mind characterized by the comprehensive exploration of issues, ideas, artifacts, and events before accepting or formulating an opinion or conclusion.

*Evaluators are encouraged to assign a score to any work sample or collection of work that does not meet benchmark (all one) level performance.*

	Capstone 4	Milestones 3	2	Benchmark 1
<b>Explanation of issues</b>	Issue/ problem to be considered critically is stated clearly and described comprehensively, delivering all relevant information necessary for full understanding.	Issue/ problem to be considered critically is stated, described, and clarified so that understanding is not seriously impeded by omissions.	Issue/ problem to be considered critically is stated but description leaves some terms undefined, ambiguities unexplored, boundaries untermimed, and/or backgrounds unknown.	Issue/ problem to be considered critically is stated without clarification or description.
<b>Evidence</b> <i>Selecting and using information to investigate a point of view or conclusion</i>	Information is taken from source(s) with enough interpretation/ evaluation to develop a comprehensive analysis or synthesis. Viewpoints of experts are questioned thoroughly.	Information is taken from source(s) with enough interpretation/ evaluation to develop a coherent analysis or synthesis. Viewpoints of experts are subject to questioning.	Information is taken from source(s) with some interpretation/ evaluation, but not enough to develop a coherent analysis or synthesis. Viewpoints of experts are taken as mostly fact, with little questioning.	Information is taken from source(s) without any interpretation/ evaluation. Viewpoints of experts are taken as fact, without question.
<b>Influence of context and assumptions</b>	Thoroughly (systematically and methodically) analyzes own and others' assumptions and carefully evaluates the relevance of contexts when presenting a position.	Identifies own and others' assumptions and several relevant contexts when presenting a position.	Questions some assumptions. Identifies several relevant contexts when presenting a position. May be more aware of others' assumptions than one's own (or vice versa).	Shows an emerging awareness of present assumptions (sometimes labels assertions as assumptions). Begins to identify some contexts when presenting a position.
<b>Student's position (perspective, thesis/hypothesis)</b>	Specific position (perspective, thesis/ hypothesis) is imaginative, taking into account the complexities of an issue. Limits of position (perspective, thesis/ hypothesis) are acknowledged. Others' points of view are synthesized within position (perspective, thesis/ hypothesis).	Specific position (perspective, thesis/ hypothesis) takes into account the complexities of an issue. Others' points of view are acknowledged within position (perspective, thesis/ hypothesis).	Specific position (perspective, thesis/ hypothesis) acknowledges different sides of an issue.	Specific position (perspective, thesis/ hypothesis) is stated, but is simplistic and obvious.
<b>Conclusions and related outcomes (implications and consequences)</b>	Conclusions and related outcomes (consequences and implications) are logical and reflect student's informed evaluation and ability to place evidence and perspectives discussed in priority order.	Conclusion is logically tied to a range of information, including opposing viewpoints; related outcomes (consequences and implications) are identified clearly.	Conclusion is logically tied to information (because information is chosen to fit the desired conclusion); some related outcomes (consequences and implications) are identified clearly.	Conclusion is inconsistently tied to some of the information discussed; related outcomes (consequences and implications) are oversimplified.

AAC&Uが調査会社に委託し、準学士、学士保持者が新規採用者の25%以上を占める企業数百社に対して実施した調査では、長期的にみて職業上成功するためには、単に専攻分野の知識や技能だけでなく、専攻に拘わらずELOsが重要だと多数の企業が回答している。いうならば、複雑さを増し、不確定な時代と言われる21世紀では、AAC&Uが唱導する幅広い知識を与える一般教育と特定の分野を深く学ぶ専攻からなる自由教育こそが、最も適切な教育のあり方であるとの合意が産業界からも得られているのである。



米国では2006年、当時の連邦教育省長官の諮問委員会が、いわゆる「スپرिंगス報告」を公表し、大学に強く「説明責任」を求めた。個人と各政府が投資している資源に見合っただけの教育成果を高等教育機関があげていることを、より客観的に示すよう求めたのである。AAC&UがELOsを提言したのも、スپرिंगス報告に対する大学関係者の一つの対案であると言える。さらに、スپرिंगス報告は、教育成果を客観的に示す方法として、例えば、CLA (Collegiate Learning Assessment) のような標準化された共通テストの活用も示唆していた。しかし、わが国以上に高等教育機関も、また、そこで学ぶ学生も多様化している米国で、その成果を画一的に測定し、評価することはなじまない。そこで、AAC&Uは、高等教育機関の説明責任を果たし、かつ各機関の多様性と自主性を

重んじる「アセスメント」の開発に乗り出し、LEAP運動の一環として、「学士課程教育での学修の正当な測定法 (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education)」としてELOごとにルーブリック(採点規準表)を開発することとなった(強調は筆者)。

ルーブリックの作成には、全米の様々な高等教育機関と多数の教員や関係者が参加し、仕事、市民生活、そして人生で成功するために全ての学生が修得すべき全てのELOsについてルーブリックが作成された。2009年の公表以来、国内外の高等教育機関がこのVALUE Rubricを採用し、それぞれの教育の実情に合わせて修正し、学修成果のアセスメントに活用している(前ページ図表4)。

このVALUE Rubricは、州立の高等教育機関の説明責任を可視化するシステムであるVoluntary System of Accountability (VSA)でも、各種の標準テストと共に、学修成果を測定し、可視化する手段の一つとして認定されている。公表されているルーブリックを各機関が修正することは、むしろ奨励されており、また、AAC&Uが公表している標準的なルーブリックも、常に見直しの作業が行われている。

### どうすればELOsを修得できるのか: High-Impact Educational Practices

ELOsが、21世紀の職業生活や社会生活で成功するために本質的で不可欠の知識や能力であっても、全ての学生が全ての学修成果を修得しているわけではない。卒業証書を授与されたとしても、全員が「学位授与の方針」で示されている学修成果を全て獲得していないことは、大学教員であれば誰でも認識していることである。

AAC&Uが提案している自由教育を通じて獲得を目指すELOsは、卒業後の職業生活においても極めて重要であることを産業界も同意していることは先に述べた通りである。しかし、AAC&Uが実施した産業界の意見調査では、最近の大学卒業生について、回答者の63%がグローバル化した社会で活躍するために必要な技能を欠いていると評価している。

では、どのように教育し、学修すればELOsを修得できるのでしょうか。とりわけ、これまで高等教育の機会

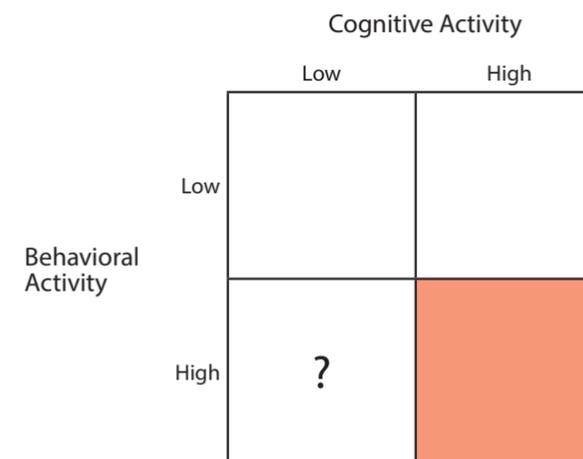
に恵まれてこなかった集団出身者や第一世代の学生にとっては、重要な課題である。そこで、LEAP運動の指導者の一人であり、NSSE (National Survey of Student Engagement) の代表であるGeorge D. Kuh教授(注5)に、どのような教育・学習方略が学生のELOsの修得に、単に「有効effective」だけでなく「影響を与えるimpact」のかの分析を委託した。その結果、以下の11の方略が、ELOsの修得に大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

High-Impact Educational Practices (HIPs)

- ・ 初年次セミナーと経験  
First-Year Seminars and Experiences
- ・ 共通の知的経験  
Common Intellectual Experiences
- ・ 学習共同体  
Learning Community
- ・ 論文執筆を重視した科目  
Writing-Intensive Courses
- ・ 共通の課題とプロジェクト  
Collaborative Assignments and Projects
- ・ 学部学生の研究活動  
Undergraduate Research
- ・ 多様性とグローバルな学習  
Diversity/Global Learning
- ・ 電子ポートフォリオ  
ePortfolios
- ・ サービス学習 / 地域社会での学習  
Service Learning, Community-based Learning
- ・ インターンシップ  
Internship
- ・ 集大成科目とプロジェクト  
Capstone Courses and Projects

これらは、いずれも、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の方略であるが、従来はその導入が体系的でなく、かえって学生の学修には有害であった。そこで、Kuh教授は、高等教育機関は、「意図的・計画的」に、少なくとも二つの方略を全ての学生に提供すべきであると提案した。日本の大学でもHIPsを導入しているが、重要なことは、単に表面的に学生が「行動面」でアクティブに活動しているだけでなく、知識の獲得と理解、獲得した知識の再構成、さらには課題の解決への活用等「知的」にもアクティブであることである。(注6)

図表5 2種類のアクティブ・ラーニング



### 次なる「飛躍」を目指して:日本への示唆

AAC&Uは、米国の学士課程教育の改善、とりわけ、より多くの人々が、単に高等教育に進学するだけではなく、21世紀のグローバル化した社会で個人的にも職業的にも成功できるような教育改革に国を挙げて取り組むための「旗振り役」を1世紀に渡って果たしてきた。今回紹介した取り組みのほかに、近年ではSTEM教育やグローバル教育の推進にも取り組んでいる。AAC&Uという大学が任意で参加する団体が、米国の高等教育のアジェンダ・セッティングに大きな役割を果たしているのは、米国連邦教育省が憲法上の制約から、高等教育には連邦政府の予算支出に関連する政策を除き、抑止的な役割しか果たせないということがある。また、高等教育政策については州政府が権限を有しており、そこで州を越えた全国的な取り組みは、AAC&UやCollege Board等の、様々な大学団体が重要な役割を果たしている。また、会員大学からの会費以外にも、各種財団からの支援も多く、潤沢な予算を背景にして専任職員も多く抱えており、各種の会議や調査研究も可能で、具体的な政策提案も可能となっている。

翻って日本では、高等教育政策及び予算は主に文部科学省主導で行われており、大学団体も、専任職員はわずか数名に限られ、政策提案ではなく、文部科学省が提案

する政策への意見表明にとどまっているのは残念である。

今回紹介した取り組みの略称LEAPは文字通り「飛躍」を意味する。AAC&Uは20世紀終わりから来るべき21世紀の到来を見据えて、新たな「自由教育」の理念のもと、全ての若者が成功できるような高等教育のあり方について、高等教育機関、大学教員、財団等あらゆる関係者を巻き込みながら、決して強制することなく、各関係者の自主性を尊重しながら、地道にかつ粘り強く取り組みを続けてきている。

わが国も人口急減期を迎え、社会の活力や国際競争力の低下が強く懸念されている。生産性向上には、国民一人ひとりの人的資本の向上が不可欠であり、今以上に多くの若者や社会人が、単に高等教育を受ける機会が増えるだけでなく、「質の高い」高等教育を享受し、21世紀の社会で活躍するために必須の知識や能力を獲得できる、そのような環境を国を挙げて整備すべき時が来ている。そのためには、各大学は、国立、公立、私立、株式会社立といった設置形態の違いを越えて連携し、一丸となってわが国の高等教育の質の改善、向上に邁進すべきではないか。

最後に、筆者が勤務する大阪大学高等教育・入試研究開発センターは、昨年AAC&Uと協定を締結し、クロス・アポイントメント制度を活用して、AAC&U前副会長のSusan Albertine博士を特任教授として採用し、一月ほど阪大で様々な助言や活動をお願いしている。今年も夏に来学の予定で、VALUE Rubricに関するセミナー等を開催することとしている。詳細については、当センターのウェブ等で確認をお願いしたい。



(注1) AAC&U. (2015). Celebrating 100 Years of Leadership for Liberal Education: AAC&U 1915-2015.  
 (注2) <https://www.aacu.org/leap/what-is-a-liberal-education>  
 (注3) AAC&U. (n.d.). An Introduction to LEAP.  
 (注4) <https://www.aacu.org/value> に詳しい説明がある。16のELOsのVALUE Rubricを入手するには、会員登録を行った後、購入の手続きが必要である。ただし、実際には無料で入手できる。また日本語版も入手できるが、同じ手続きが必要である。  
 (注5) George D. Kuh (2008), High-Impact Educational Practices: What They Are, Who Has Access to Them, And Why They Matter. AAC&U.  
 (注6) Richard E. Mayer. (2004), "Should There Be a Three-Strikes Rule Against Pure Discovery Learning?" American Psychologist, January 2004. p.15.